

近況・所感

かいま見た「ウォール街を占拠せよ」

鈴木 凜太郎



10月13日、アメリカ旅行の最後の日はニューヨークだった。

午後、あちこちで地元の人に道を聞きながら徒歩と地下鉄でウォール・ストリートにたどり着き、「Occupy Wall Street」を現場の公園で見た。公園の大きさは日比谷公園の4分の1程度、集まっている人々はせいぜい2千人程度と、わが国のわれわれの時代の数万人規模の集会比べれば極めて小規模。しかし、その抗議の内容は深く、広範囲にわたる。

ほとんどが若者、peaceful、quietな運動で、1960〜70年代の「非暴力、不服従」を貫いたベトナム反戦運動、マーチン・ルーサー・キング牧師を指導者とする公民権運動（ワシントン大行進）のよき伝統を受け

継いでいるように思われた。

帰国してからテレビで見たのだが、公園で若者たちは「This Land Is Your Land」を歌っていた。もともと米国独立を誇る歌であるが、われわれもベトナム反戦運動のころ、「We Shall Overcome」や「Where All The Flowers Come」などとともにお馴染みの曲で、今でもそらで歌うことが出来る。

私が見た折は騒音の原因となるスピーカーを使わず、あちこちでリーダーが叫ぶスローガンを大勢が唱和するというやり方で声をあげていた。公園の内外を一所懸命掃除している若者も多かった。アメリカ人の偉いところはこういう深刻な運動の最中にもユーモアを忘れないところで、ある青年は「Occupied

Wallstreet Journal」という新聞を配っていた。3部ほど貫ったが、世界中のビジネス・エリートが読む新聞を活字の字体までパクって、自分たちの主張を載せているのだ。

冒頭の「世界で一番大事なこと」という署名記事は、今や全米のみならず、日本を除く世界中に広がっている若者たちの「1%の人間が99%の富を独占している。職をよこせ、まとも



反対、原発廃止……」といううな至極当たり前の主張を穏やかかつ論理的に説いている。もっとも別の一角のコラムでは、「共和党は勿論、民主党もGreedy Corporateからカネを貰っている。警察も軍隊も裁判所も彼らのものだ。大マスコミも彼らの操り人形だ。そんなマスコミが取材に来て『一体なにがしたいんだ』と聞いてくるから、『かくなる上は全てを破壊する』と答えることにしている」と過激なことを言っている。主張は一樣でない。

驚いたのはこの新聞によると、10月3日にJPMorgan Chase Bankがニューヨーク市警察基金に460万ドル（3.5億円）もの寄付をしたという。まさに恥も外聞もないGreedy＝強欲＝丸出しである。日本だったら大企業は金儲けだけが目的ではありませんと、環境保護や難民救済に努力していることをPRするものだが、このあたりもまたアメリカ式というべきか。（会員）